

氏 名	朴 宥 貞
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 362 号
学位授与年月日	平 成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉粉青沙器の現代的表現研究－自然と日常の出会いを主題にした民 画的表現－ 〈作品〉粉青沙器の現代化に関する表現研究
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (美術学部) 島 田 文 雄
(論文第 1 副査)	〃 准教授 (〃) 片 山 ま び
(作品第 1 副査)	〃 教 授 (〃) 豊 福 誠
(副査)	〃 〃 (〃) 篠 原 行 雄

(論文内容の要旨)

ある国家の文化を端的に言うことは難しい。しかし文化のある断面を通じて、国家の全体像を類推することはできる。ハーバード・リードは、「陶芸は最も単純で抽象的な芸術だ。その国の陶器を見れば文化の品格が分かる。すなわち一つの国の民族精神と芸術を調べるならば、その国の陶器を見よ」と述べた。陶芸とは、国家の政治、社会、経済における繁栄、そして文化の水準を示す尺度でもあるのだ。

また、陶芸とは、食文化とも密接な性質を持つ芸術だ。そして、陶芸は、最も単純だが最も厳格な工程を経なければならないという点で、社会的に安定した時期でなければ隆盛しないものである。さらに、陶器は、深い抽象性を持つ。それは、粘土が焼成という人間の力が及ばない次元で、複雑な変数による生成消滅を経て、完成に達するからだ。

現代、美術においては諸領域の壁が崩れ、文化のグローバリゼーションが叫ばれている。その中で、現代陶芸の多様化もまた必然の現象であろう。私たちの生活が過去とは異なるように、現代陶芸も過去のものとは異ならなければならない。たしかに、純粋に造形のありかたを追求する工芸家に対しては、純粋美術の模倣に過ぎないという批判的な見解もある。だが、こうした批判は、今日の現代陶芸を総体的に眺めることが出来ない偏狭な見解だと言わざるをえない。

芸術と生産の区分は、次第に瓦解しつつある。この傾向は、工芸、デザイン、そして純粋美術が、驚くほど内的な類似性と深層的な同質性を持っていることを示している。また、各領域間の区分が瓦解しているということは、どの領域であっても芸術を追求することは根源的に同等であることを示しているであろう。

そのような意味で、現代陶芸は、実用性と機能性という、かつての工芸の条件を抜け出すことで、かえって実用性と機能性が共存する、いわば包括的な概念へと転化しているのだ。

さて、すべての芸術行為は、その時代の思想や価値観に直接的・間接的な影響を受けている。そのことを思うならば、あらゆる芸術家たちは、伝統の継承という課題と、伝統から逸脱するという課題との、二重の葛藤の中で創造を模索してきた。伝統に対する価値観は、このような観点に基づいて確立する必要がある。伝統とは、新しい時代的流れを受け入れつつ、新しい形式で創造されるときに初めて、あたかも生命を持つかのように産み出されるのだ。

その上で、私は改めて伝統的の現代化にともなう課題を考察した。それは、現代を生きる私の感性に合う表現を、いかにして伝統の流れと接続させるか、ということに尽きる。真の芸術は、人生に基盤を

置くものである。それは、共同体を生きるすべての人の生を反映したものである。すなわち、伝統を現代化することは、現代を生きる韓国人すべての生を反映しなければならない。ゆえに、陶芸家として必要なのは、韓国人がこれまで追求した独特の美的価値を知ること、過去と現在を貫く韓国人の感性を掴むこと、その上で現代的な美術表現を行うことであろう。

このような考えは、自然に、粉青沙器に対する関心と再解釈につながった。粉青沙器は、現代の私たちの感性に響く特質を持つ。従って、粉青沙器を現代的に再創造することで、人生の健康性と、工芸の造形的言語としての役割を、同時に追求することができるのではないだろうか。

本論文では、粉青沙器の美学とともに、「森」というテーマを通じて形象化される私の陶芸作品について論じた。それは、筆者の人生の中で体得した思惟過程を経て内面化された世界でもある。

第2章では、粉青沙器が持つ、現代美術に通じる現代性を分析した。特に朝鮮の陶器を通じて、韓国人の美意識を包括的に扱った。さらに、具体的な事例として、現代の粉青陶芸作家3人と画家3人の活動に着目し、「伝統の現代化」という課題に共通する要素を浮かび上がらせた。その上で、現代陶芸の状況に対する私自身の意見を表明し、自作の中にある現代的な特質を述べた。

第3章では、自作品のテーマ、造形と技術の特質について詳述した。私のテーマは、日常の体験と思惟の中から、自我を中心とする世界観(私と家族、社会、世界)と自然の象徴である「森」のイメージが、相互一体となる世界を作ることである。それは韓国の伝統的な民画の表現様式に近いものだ。そこには気韻生動の追求もある。また、私の作品の造形の主な特質は、朝鮮の陶磁様式の一つである扁壺を再解釈している点である。扁壺は、線描を生かす画面にもなっている。特に、粉青沙器に五方色を施すことで、これまでになかった表現を生み出した。さらに、私の作品の技術的側面の特質として、石膏枠組みによる加圧成形、粉青沙器の表現技法、釉薬及び白化粧、焼成技法に対して叙述した。

(博士論文審査結果の要旨)

朴宥貞は韓国からの留学生であるが、同国内ですでに若手女流陶芸家として評価を受けている作家でもある。朴宥貞の論文は、21世紀の今なお熱いまなざしが向けられる15～16世紀の粉青沙器について、その理由付けと新たな解釈を論じたものとなっている。

まず第1章では、粉青沙器の「現代性」について造形を主体に分析を繰り広げる。第2章では粉青沙器にインスパイアされた現代作家たちの陶芸や絵画作品、また自作について取り上げている。なかでも既存の作家たちが取り上げてこなかった、「キャンバス」としての粉青の可能性を論じた点は注目に値するであろう。

作家が同時代に生きる他の作家を論じることは、ともすれば客観性を損なう危険な試みである。しかし朴宥貞自身が40年代生まれの作家たちに育まれた経験をもつ以上、彼らの作品を回顧し、自作との差を論じることは必要なプロセスでもある。また80～90年代という韓国現代史のなかでも激動の時代のなかで陶芸を志した自作の回顧は、韓国現代陶芸のオーラル・ヒストリーとしての価値を持つと言えるであろう。

第3章では、提出作品が論じられる。ここでは「キャンバス」に何を描きだしたかったのかが仔細に記される。子供をもつ母として、あるいは日常生活のなかでの心の動きこそがその「キャンバス」に記されるべき主題であり、男性作家とは異なるドメスティックな制作態度が明らかにされる。また韓国の伝統色である五方色を加えること、「キャンバス」化をより効果的にする扁壺を形として選択したことなどが述べられ、その作品のオリジナリティを明らかにしている。とりわけ色彩への気づきは日本留学の大きな成果であり、モノトーンの粉青に新たな色彩表現の可能性を切り開くこととなったという記述は、本論文の要ともなっている。

朴宥貞の作品は、韓国の伝統文化、母性や家族といったドメスティックな要素を核とする。その意味では、韓国の伝統文化について知識を持たない観者、あるいは男性にも理解しづらい要素が秘められているのかもしれない。しかし本論文は、そうした外部の人間を朴宥貞の作品のなかに招き入れることを可能としている。実技系の博士論文には作品との補完関係にあることが何よりも求められようが、その意味で本論文は十分な価値を持っていると思われ、博士学位授与に値するものと判断する。

(作品審査結果の要旨)

12月の博士審査発表展に出品した作品は、「森一中道」、「森一太平天下」、「森一定心應物」、「森一愛する娘たちに」、「虎とカササギ」、「森一世界」、「森一日常の中で」以上7点の扁壺である。粉青沙器の現代的表現をテーマに研究を進めてきた作者の一つの答えとなる作品群である。

扁壺形の粉青沙器を提出作品とし、粉青沙器を研究テーマに本課程に入学した作者の一貫した研究姿勢は、平常の修作の中に数多く見出すことが出来た。平常制作では、タタラ作り（板作り）による角型の器形と、鉄絵による表現を中心に制作していた。器形や鉄絵の荒々しさは、男性的な力強さと共に、粗雑さを感じさせる作品であり、作者の混沌とした胸中を表している様に思えた。

提出作品では石膏型を使った、丸みのあるゆったりとした器形と、角形で中央部が貫けた角ドーナツ型の2種類の扁壺を制作している。素地には鉄分の多い陶土を用いて石膏型への打ち込み成型で胴の形を作り、後から口作りをして、それぞれに口の形を変えて、形の印象に変化を持たせている。生乾きのタイミングを見はからって、白化粧土をスポンジで表面に施し、器面に柔らかな表情をあたえている。素焼きの後に、下絵の具を使って絵付けをしているが、これまでの作品では見る事のなかった彩色による表現が斬新さを際立たせている。言うまでもなく、粉青沙器は無彩色であり、韓国の伝統的な陶芸に彩色を見る事はない。五方色と言われる韓国の伝統色を基調にした彩色は、ゴム抜きにより現れた素地の色と、彩のある白化粧と良く調和して、作者の豊かな感性の表現力の一つとなっている。

テーマを「森」とした作品に込められた作者の思いは、過去の記憶と現在、母性や家族といった、作者の内面にある生命感や宇宙観など、韓国人の精神性の高さを、静かな作風の中に示している。それぞれの作品に象徴的表現が込められており、一個の完結した強い意志を感じさせる作品としてまとめられている。粉青沙器の新しい表現として、韓国でどのような評価を得るかは未知数であるが、工芸の造形表現として優れた作品であり、博士学位授与にふさわしい成果である。

(総合審査結果の要旨)

「伝統とは、新しい時代的流れを受けつつ、新しい形式で創造されるときにあたかも生命を持つかのように生み出されるもの。」作者はこの観点に立って伝統の現代化に伴う課題を考察、制作している。粉青沙器は現代を生きる作者の感性をいかにして伝統の流れと合致させるか。伝統を現代化することは、韓国人がこれまで追求してきた独特の美的価値、過去と現在を貫く韓国人の感性を掴み現代的な美的表現を行うことにある。作者は粉青沙器が現代の感性に響く特性を持っていると考え、粉青沙器は職人らの生活、感情、人生等が持つ自由な表現性と健康性に着目した。粉青沙器から感じられる気韻生動は現代の絵画作品においても体現されるべき特質で、感性に力強く訴える純粋な作家自身の叫びである。気韻生動は人間の動力や身体活動の根源、さらには魂の調和、生命体の活気が作品に入り込んだ精神的な「魂」である。直感的な表現様式の内在する自由さは自然から発する気韻生動の生命力で感性である。論文ではこの命題に沿って粉青沙器と韓国現代美術を考察し、粉青沙器の意義を作者の過去の作品から検証し、絵画として捉え、その自由的表現に東洋絵画を形成している「線」「気韻生動」の意義を読み取っている。朝鮮民画の洗練されず規範を意に介さない強迫観念もない特性を粉青沙器に認め、単に実用

的な目的にそって焼かれたととらえた。作者は制作に当たって形態や色彩にとらわれない事、表現の題材に意味を持たせる事、自我と渾然一体の追求、逆遠近法、朝鮮文化における五方色の使用など作者を束縛している観念を打ち破り制作を試みている。森シリーズでは、日常を守り平常心を表した「中道」、内面の天下太平の森を大事に保存する願望を表した「天下太平」、動じない気持ちで外部の事象に対応する心を表した「定心應物」、虎とカササギの吉祥、五方色や四方位を組み合わせながら象徴的表現を作品に込めている。線と「気韻生動」の現代的表現を試み、優れた論文と作品である。また色彩を用いることにより、新たな粉青砂器の世界を切り開こうとする意欲とその表現に韓国文化を深く内省した作品は技巧にとらわれ過ぎない自由闊達な精神を重んじ精神性を加味した作品といえる。韓国精神を表現した優れた論文、作品である。博士学位授与に値するものと判断する。